

今、私がこの身に受けているこの「いのち」は、必ずしも私のものではありません。私のものとは、私の自由になるものという意味です。例えば、生まれる時も死ぬ時も自由にはなりません。

また、人生の道中にしても決して自由にはならない。このことは「いのち」が私のはからいより、深くて広いものであることを意味しています。はからいの世界では、自分を思うように出来ると錯覚し、自分を私有化し、他と比べては一喜一憂する。

しかし、それが破られて「いのち」の世界に呼び返されてみると、限りなく広く深い「いのち」をこの身に受けていることに気づきます。念仏とは、どこまでもはからいつつ暮す私たちを、「いのち」の世界に呼び返そうとする叫びであります。

私たちの思いは、それぞれバラバラです。しかし、それぞれの身にいただいている「いのち」は決してバラバラのものではありません。

だから、真に生きている人の生きざまに感動します。感動するとは「いのち」自身が呼び合うことです。

それに気づいてみると、そこに限りなき「いのち」のつながりがあることが分かります。『浄土論註』に迦羅求羅虫（からぐらちゅう）の譬えがあります。迦羅求羅虫（からぐらちゅう）は小さな風を受けたら小さくふくれ、大きな風を受けたら大きくふくれます。すなわち受けた風の大きさが迦羅求羅虫（からぐらちゅう）の大きさになります。

人間についても同じようなことが言えるのではないのでしょうか。つまり、豊かな心遣いは人を豊かにします。人間の大きさはすなわち、今まで受けてきたものの大きさということが出来ます。「オレがオレが」と言っている者は小さい。大いなるものに遇わせてもらっている者は大いなる世界に在るのであり、力に満ちた人であるということが言えます。